K・Way（ORNL）との談話のなかから

中島龍三（法　大）

二年前にWay 女史に会つた時には，Washington D.C. 時代に比べて随分年をとつたものだと感じたのだが，東京での彼女はお客様気分も手伝つてか，意外に老嬢くさゝが押しかくされていて愛想がよかつた。というのは，我々の下手な英語を我慢してよくきいて呉れ，そのあとでなかなかお世辞たつぷりな意見をいつていたことなども推測された。シグマ委員会が扱つている核データと彼女のグループが扱つている核データとの相関関係は殆んどないといつてよいのだが，Wayは来日以前からシグマ委員会の活動に強い関心を示していたので，彼女との談話のなかから"核データ"に関する部分を，思い出しながら書いてみる。

データ収集の方法とか整理の方法とかについては，特別なコメントを彼女からひき出せなかつたが，CINDA形式の文献リストをもう少し改良することを考えたらどうかという意見だつた。彼女にとつてはCINDAのコメント欄が余り気に入らないらしい。しかしCINDAそのものが不満なのではなく，むしろ文献リストとしてのCINDAの価値は高く評価しているのである。収集データの表現法については，BNL－325とかMcGowan 等の荷電粒子による断面積とか非常に便利なものがあるけれども，そういうものを作り上げることだけを最終目標にしないで，それらを利用して評価（evaluation）を行なうことに重点をおくべきではないか，というのがWayの意見である。データの評価にあたつては，特に実験上の問題点をも検討して評価すべきだと思うが，今迄に例えば雑誌Nuclear Data に投稿されたもので評価に関する論文についていうとこの点が非常に不満であると洩らしていた。その意味では，シグマ委員会で行なつている評価活動（JNDCニュース№4参照）に期待している。是非Nuclear Data に投稿してほしいとのことである。

離日する前日，Wayのグループの今後の問題について話し合つたのであるが，彼女は近々停年で退職することになる。その後は専らNuclear DataのSection Aの編集に当る予定だそうである。Section B（従来のNuclear Data Sheets）については，"お前が日本に帰つてからあとに来た若い人々は，電子計算機を使うことだけしか考えなかつた。計算機を使つてデータを収集すること自体は賛成なのだが，データの評価にはやはり計算機の能力に加えて人間の考える力が大切なのだという自分の主張とマツチしないことが屢々あるので，Section BはMr.X（公表の了承をとつてないので，この原稿を書いている時点では特に名前を伏せておこう。）に任かせるつもりだが。。。。。"と云つていた。別れの時のWayの眼にはキラリと光るものが認められたが，単なる惜別の涙であるとは私には受取れなかつた。